

- 1 ジョージ・E.ラッドの

歴史的千年王国説

とユダヤ人伝道の神学的位置づけ

一宮基督教研究所
安黒 務
<http://www.aguro.jp/>
<http://icici.intranets.co.jp/>
aguro@mth.biglobe.ne.jp

- 2 歴史的千年王国説と
ユダヤ人伝道の神学的位置づけ

■ 序

1. 預言的聖書箇所解釈の原則の検討
2. イスラエル民族の神学的位置づけ
3. 神の国の概念と千年王国

■ 結び

- 3 ●序：私自身の系譜①救い

■ 関西学院大学時代：雑多な救いの背景

1. 接点：映画・特伝集『ここに愛がある』本田弘慈先生（ホーリネス派）
2. 導き：KGK（キリスト者学生会）キャンパー片岡主事（ルーテル派）、真鍋夫人（メノナイト・ブレザレン）
3. 所属：スウェーデン・バプテスト系諸教会をベースにするオレブロ・ミッションー日本福音教会（Japan Evangelical Churches）（カリスマ派）
4. 養い・交わり：山中良知先生研究室（改革派）

- 4 序：私自身の系譜②霊的養い・神学教育

1. KGKにおける超教派の交わり：超教派的思考を身につける
 1. 関西学院大学の聖書研究会ボプラ、KGK春季学校・夏季キャンプ
2. 関西学院大学経済学部：宗教社会学的思考を学ぶ
 1. 御言葉による直観的召命観ではなく、天職を求めての葛藤—天川潤二郎ゼミ—卒論テーマ『天職意識の喪失過程—英国の産業革命前後の経済における宗教的基盤についての研究—』
3. 関西聖書学院
 1. 三年コース卒業：キリストを愛し、聖書を愛することを学ぶ
4. 神戸改革派神学校
 1. 部分聴講：キリスト教哲学を学ぶ
5. フラー神学校宣教学部：
 1. 世界宣教の大切さを学ぶ—グローバル・エデュケーション・プログラム
6. 東京基督教大学の共立研究所（卒業）、東京基督神学校（聴講）：
 1. 宇田進師に師事し、宣教学の最先端の学びと福音主義神学のエッセンスを徹底的に身につける—三年間で、共立と東京基督神学校のほとんどの科目を、聖書神学・歴史神学・組織神学部門を徹底的に学ぶ

- 5 序：私自身の系譜③神学研究

1. 初期の学びの助けになったもの—救済論中心
 1. 聖書：ハーレイ著『聖書ハンドブック』
 2. 義認と聖化：ウォッチマン・ニー著『キリスト者の標準』
 3. 聖霊の満たし：R.H.カルベツパー著『カリスマ運動を考える』
 1. ヘンドリクス・ベルコフ著『聖霊の教理』
 2. J.D.G.ダン著『イエスと御霊』
 3. J.V.テイラー著『仲介者なる神』
2. 現在の取り組み—包括的な神学の研究
 1. 歴史神学：宇田進著『福音主義キリスト教と福音派』、『総説現代福音主義神学』、他
 2. 組織神学：M.J.エリクソン著『キリスト教神学』、他
 3. 聖書神学：G.E.ラッド著『新約聖書神学』、『新約聖書批評学』、他

- 6 序：今回の発表の輪郭①

1. 福音主義神学陣営の一員として
 1. 宇田進著『福音主義キリスト教と福音派』、『総説現代福音主義神学』
2. スウェーデン・バプテスト系の伝統の中に生きる者として
 1. M.J.エリクソン著『キリスト教神学』
3. エリクソン著『キリスト教神学』の終末論理解の文献資料源は何か？
 1. G.E.ラッド著作集をベースにしている

4. ラッドの著作集は、どのような神学書をベースにしているのか？
 1. 厳密な聖書解釈において貢献してきた
 1. ゲルハルド・ヴォース著『聖書神学』、『パウロの終末論』
 2. ジョン・マーレー著『ローマの信徒への手紙』

7 序：今回の発表の輪郭②

1. 「デイスペンセーションな前千年王国説」の影響の強い背景の中にあるバプテストの流れの中にいたエリクソンやラッドが、
2. 「後千年王国説」「無千年王国説」の背景をもつ、
ヴォースやマーレーの聖書解釈の適切性を認識し、
3. 「デイスペンセーション主義の影響」の課題を克服しつつ、
教会の歴史の最初の時期の認識であり、継承されてきた
4. “歴史的”前千年王国説として再提起している。
ヴォースやマーレーの厳密で正確な聖書解釈においては、
5. 福音派全体としての“共通項”を
確認できるのではないか。
その“共通項”に立ちつつ、多様な千年王国説が形成されていく
6. プロセスを丁寧に検証することが大切である。

8 序：今回の発表の輪郭③

1. G.E.ラッド著作集の中で、今回のテーマを分かりやすく、扱っている文献は何か？
2. “The Last Things” George Eldon Ladd
 1. How to Interpret the Prophetic Scriptures (1章)
 2. What About Israel? (2章)
 3. The Kingdom of God (9章)

9 1. 預言的聖書箇所は どのように解釈すべきなのか？

1. 共通する聖書観—方法論の問題
2. 全聖書はひとつの結論を導き出すのか
3. 二つの異なった主題
 1. 旧約—イスラエル民族
 2. 新約—キリスト教会
4. 二つの異なった回答
 1. デイスペンセーション主義
 2. 啓示の漸進性を認識する立場(G.ヴォース, G.E.ラッド)
5. 三つのメシヤ的人物像
 1. ダビデのような王：イザヤ11章
 2. 神とともに天の御座に：ダニエル書7章
 3. 苦難のしもべ：イザヤ53章
6. 基本的な聖書解釈方法
 1. イエスの人格・使命の視点において旧約聖書の預言を再解釈
 2. キリスト論であれ、終末論であれ—教理における最終的な言葉は新約聖書の中に

10 【挿入】聖書ハンドブックより

旧約聖書における三大思想の発展の段階

1. メシヤの国民：アブラハムへの祝福の約束
 - ヘブル民族は、この民族を通して全世界が祝福されるために創始されたものである。
2. メシヤの家族：ダビデへの約束
 - ヘブル民族が世界を祝福する方法は、ダビデの家の者によってである。
3. メシヤ：イエスの誕生
 - ダビデ家の者が世界を祝福する道は、その家の者(家系)のうちに生れるひとりの偉大な王によってである。

11 2. イスラエル民族の神学的位置づけ

①聖書解釈の原則

1. 旧約聖書は、イエス・キリストにおいて与えられた新しい啓示の視点で解釈
 1. 新約聖書がイスラエルについて教えているものは何か？
 2. 旧約聖書は、イスラエルの未来における救いを望み見ている
2. 新約聖書は、教会において霊的に成就されるべきであると、それらの預言を再解釈しているのか？
 1. 教会は新しい、真のイスラエルなのか？
 2. あるいは、神は依然として、彼の民イスラエルのための未来をもっておられるのか？

12 2. イスラエル民族の神学的位置づけ

②ローマ書9-11章の教えの検討(a)

1. 記述の動機:パウロの心の痛み(9:2)
2. 最初のポイント
 1. 「イスラエル」、真の霊的イスラエル、神の民は—アブラハムの血縁的子孫と同一ではない。(9:6,7)
 2. 神は、イサクを選び、イシュマエルを斥けられた。(9:8)
 3. この原則はローマ書の最初にも記述(2:28,29)
 4. この原則—パウロが創始したものではない。
 1. 旧約にすでにあった。(エレミヤ4:4)
 2. ヨハネの記述(黙示録2:9,3:9)

13 2. イスラエル民族の神学的位置づけ

②ローマ書9-11章の教えの検討(b)

1. パウロの思想
2. 第一義的に、贖罪の歴史において、
 1. アブラハムに与えられた約束の
 2. 相続人やヤコブの神の主権的選び
3. イスラエルの不信仰
 1. ホセア書—「姦淫の女をめとれ」—イスラエルの霊的状态の象徴
4. イスラエルに対する神の拒絶
 1. 最終的でも、回復できないものでもない
 2. 未来におけるイスラエルの救いへの言及

14 2. イスラエル民族の神学的位置づけ

②ローマ書9-11章の教えの検討(c)

1. 神は、彼の民を保護されてきた。(11:16)
 1. すべてのイスラエルが依然として救われるべきである。
2. イスラエルの救いは、
 1. モーゼのいけにえの体系の再興と、ともに再建されたユダヤ人の神殿によるのではなく
 2. 教会とともにすでに確立されたキリストの血においてなされた新しい契約を通してでなければならない。
3. イスラエルは、「預言についての時刻表」ではない。
 1. イスラエルのバレスチナへの帰還は、おそらく、イスラエルに対する神の計画の一部分ではある。
 2. しかし、新約聖書はこの問題について明らかに語っていない。
 3. しかしながら、世紀を通じての民としてのイスラエルの保護は、神の民イスラエルはしりぞけられていないというひとつのしるしである。

15 2. イスラエル民族の神学的位置づけ

②ローマ書9-11章の教えの検討(d)

- ジョン・マーレーの解釈
1. 一部のイスラエル人が頑なになったのは、異邦人全体が救いに達するまでである。
 1. 頑なになったのは、一部の者であって、全体ではない。
 2. 一時的であって、最終的にはない。
 2. 頑なになることに終わりがくる。
 1. 文脈的考察—「選ばれた者の総数」との解釈を妨げている。
 2. イスラエルの「皆」fulnessは、イスラエルの選ばれた者の皆ではありえない。
 3. 民族としてのイスラエル人の大部分の救いがある。
 1. この「皆の救い」は、イスラエルの罪と失敗に対象されているので、
 2. 「全体としてのイスラエル」の信仰と悔い改めへの回復のこと。
 3. もはや残された者が救われる時ではなく、「イスラエルの大部分の者」が救われる状況を心に描いている。
 4. 「イスラエルの皆の救い」は、異邦人に非常に大きい祝福をもたらす。
 5. 民族としてのイスラエル人の救いにおいて、「キリストを信じる信仰」以外の特権や身分の暗示は見られない。

16 3. 神の国

1. 「神の国」—イエスの教えにおける中心主題
 1. 「神の国」の二重性: 現在性と未来性
 2. 贖罪の歴史—「主の日」によって二つの時代に分けられる
2. パウロ—キリストの勝利的支配について
 - 15:23 しかし、おのおのにその順番があります。
 - まず初穂であるキリスト、
 - 次にキリストの再臨のときキリストに属している者です。
 - 15:24 それから終わりが来ます。

17 3. 神の国

1. 贖罪の歴史の目標・ゴール: 神の国
 1. 神の国の「終末論的側面」
 2. いつ、どのようなかたちで「神の国」は来るのか？
2. 「主の日」についての見方
 1. 単一の複合的な出来事: 遠方の山のように
 2. 主の日、人の子の来臨、死者の復活、最後の審判: ひとつの山なみとして

18 3. 神の国: 「千年王国」についての神学

1. 後千年王国説:
 - 勝利的宣教、キリストの霊的支配による変革、楽観的見方
2. 無千年王国説:
 - 文字通りの千年王国はない、霊的に解釈、悲観的見方
3. 前千年王国説
 1. デイスペンセーション的な前千年王国説
 2. 歴史的な前千年王国説
 1. デイスペンセーション的な立場がもつ課題への取り組み
 2. 後千年王国説・無千年王国説のすぐれた点も包括

19 3. 神の国

1. ヨハネの黙示録において
 1. この時間的枠組み—修正されている。
 2. キリストの再臨における単一の出来事において生起するキリストの勝利→サタンに対する勝利は二段階で起こる(黙示録20章)
2. 第一の復活(20:4,5):
 1. サタンの投獄は一千年間続く(20:2,3)。
 2. 殉教者は、一千年間の最初に復活し、キリストとともに支配する。
3. 第二の復活(20:5):
 1. 死者の残りの者は、一千年の終わりに復活し、
 2. 火の池に投げ込まれる(20:10)。

20 3. 神の国

1. 来るべき時代が開始される前に、
 1. 一千年間、歴史の中で、地上におけるキリストの支配が予想されている。
2. 千年期前再臨説—最も自然な解釈、
 1. キリストの一千年間の支配を教えている唯一の箇所、butこのことは反対の論拠にはならない
 2. 旧約聖書の預言者
 1. 教会の時代を予想していなかった。
 2. 主の日とそれの中のイスラエルの役割の視点において、その未来を一緒に見ていた。
 3. 遠く山々を眺望—ひとつの山と見えるが、山と山の間には谷がある

21 3. 神の国: デイスペンセーション的な前千年王国説の特徴①

千年王国の時期の理解

1. 第一義的にユダヤ人のためのもの
 1. イスラエルの国土の回復
 2. 神殿の再建
 3. 旧約聖書時代のいけにえの体系の再設立
 4. 民族としてのイスラエルについての旧約聖書預言のすべては、文字通り成就する
2. 神は、二つの異なったプログラムと異なった祝福をもつ、イスラエルと教会という二つの別個の、分けられた人々をもっておられる。
 1. イスラエルに対する神のプログラムは、神政国家であり、地上にあるものである。
 2. 教会に対する神の目的は、普遍的で霊的なものである。

22 3. 神の国: デイスペンセーション的な前千年王国説への反論①

イスラエルの未来について議論されている二つの書簡

1. **ヘブル8章**
 1. **型と影の時代**
 1. 旧約の礼拝組織－礼拝において描かれていた実体がキリストにおいてもたらされたときから、廃止された。
 2. **ローマ11章**
 1. **教会＝霊的イスラエル**
 1. 文字上のイスラエルは、まだ再びオリーブの木に接木されうる。そして真のイスラエルに含まれる。
 2. それゆえ、第一義的にユダヤの特徴をもつものとして、千年王国をみることは不可能である。

23 **3. 神の国－キリストにおける神の贖罪的支配はどこで始められるのか？**

1. **キリストの復活－それ自身終末的事件**
 1. 死者からの初穂－終わりの日の始まり
2. **神の国の現在性**
 1. 実現された終末論
 2. 終わりの日の出来事の断片－歴史の只中に植えつけられた

24 **3. 神の国－「終わりの日」について**

1. **聖書－「終わりの日」としてこの時代について語っている。**
 1. 2:17『神は言われる。終わりの日に、わたしの霊をすべての人に注ぐ。すると、あなたがたの息子や娘は預言し、青年は幻を見、老人は夢を見る。
 2. ペンテコステの日に、御霊を注がれたとき
 3. ペテロー御霊の賜物についてのメシヤ的預言を引用(使徒2:17)
2. **旧約聖書において－「終わりの日」は**
 1. 歴史の終わり－神の終末における王国の時代＝メシヤの時代(イザ2:2、ホセア3:5、エレ23:20)
3. **ペテロー「終わりの日」を歴史の中に**
 1. 「主の日」は－まだ未来にある。(使徒2:20)
 2. 「主の日」は－「終わりの日」によって先行されている。

25 **3. 神の国－「終わりの日」の二重性**

1. **聖書－「終わりの日」としてこの時代について語っている。**
 1. ヘブル1:2 この終わりの時には、御子によって、私たちに語られました。
 2. 多くの福音主義の神学者－「終わりの日」－終末直前の最後の時代として
2. **新約聖書－イエスとペンテコステによって導入された新しい時代として引用**
 1. クリスマン－ふたつの時代に生かされている
 2. クリスマン
 1. すでに来るべきいのちと力を経験しているゆえに
 2. 来るべき時代を相続するように運命づけられている

26 **3. 神の国: 千年王国説の議論の解決**

1. **それぞれの説**
 1. 一長一短であり、疑問の余地のない見方なし
 2. このような場合－より困難の少ない見方を見出す努力をすべき
2. **後千年王国説**
 1. 福音宣教における楽観主義 vs 信仰がさめるとの記述
 2. キリストの肉体的存在なしの地上支配の描写なし
3. **無千年王国説**
 1. 前千年王国説の概念－単一の聖書箇所(に)に依拠し批判
 2. 教理－単一の聖書箇所(に)に依拠すべきものでない
4. **歴史的な前千年王国説**
 1. ひとつの見方が、もう一つの見方ができるよりも、さらに良いかたちで特別な箇所を説明できる
 2. 熟20章の「二つの復活」に対する無千年王国説の説明の困難さ－聖書解釈の原則をまげることになる
 3. 単一の聖書箇所(に)に依拠するものではなく、それを暗示している多くの聖書箇所あり(1コリ15:22-24、ルカ14:14-20:35、1コリ15:23、ピリピ3:11、1テサ4:16)
 4. 二段階の復活(ダニエル12:2、ヨハネ5:29)
5. **関連する聖書箇所への「適合性」の観点から－前千年王国説がより自然な解釈**

27 **●結論**

28 **関連サイト**

- <http://www.aguro.jp/>
 - 一宮基督教研究所サーバー:
 - 約30年間の安黒務の小さな研究の積み重ねを掲載。
- <http://iciici.intranets.co.jp/>
 - 一宮基督教研究所イントラネット:
 - 今回の研究会のパネル・ディスカッションの継続的展開の場を模索して、再開させていただいたネット上にあるグループ・ソフトウエア
 - 参加希望者は、下記の安黒のメール・アドレスに「ICIイントラネットへの登録案内状を送ってください。」とメールください。(無料)
 - aguro@math.biglobe.ne.jp

1 歴史的な前千年王国説と
ユダヤ人伝道の神学的な位置づけ

日本福音主義神学会
西部部会春期研究会議
関西聖書学院: 組織神学講師
安黒 務

2 『ローマの信徒への手紙』
ジョン・マーレイ著、松田一男訳

1. 緒論
 1. 9-11章の目的
 2. 内容の要約
2. 本文と解説と注
 1. 第9章
 1. イスラエルの不信仰
 2. 神の真実と義の弁明
 2. 第10章
 - ・ 信仰による義
 3. 第11章
 - ・ イスラエルの回復
 1. 残された者その他の者
 2. イスラエル全体の救い★
 3. 異邦人全体の救いとイスラエルの救い★
 4. 頌栄

3 『ファンダメンタリズムをリフォームする』

- フラー神学校におけるG. E. ラッドの位置

4 『新約聖書神学』
ジョージ・E・ラッド著

- 1 ■ 第四部: パウロ
 - 37章 教会
 1. 様式
 2. カリスマタ
 3. エクレシア
 4. 神の民
 5. イスラエル★
 6. 神の宮
 7. 終末論的民
 8. 聖霊交わり
 9. 聖徒
 10. 信者
 11. キリストのからだ
 12. ユーカリスト
 13. 洗礼
- 2 ■ 38章 終末論
 1. 導入
 2. 中間状態
 3. 死者の眠り
 4. キリストの再臨★
 5. 神の国
 6. 無法の神秘
 7. イスラエルがかたくなにされることと最後の救い★
 8. 復活と携挙
 9. 審判
 10. 完成

5 『ヨハネの黙示録講解』
ジョージ・E・ラッド著

- 1 1. 序と最初の幻
2. 七つの教会への手紙
3. 七つの教会への手紙(続)
4. 天にある御座
5. 封印された書物
6. 六つの封印
7. 二つの大群衆
8. 七つの封印と六つのラッパ
9. 六つのラッパ(続)

- 2
10. 天使と小さな書物
 11. 宮のはかりと二人の証人
 12. 竜と女と彼女の子孫
 13. 二匹の獣
 14. 保証についての幻
 15. 鉢の準備
 16. 七つの鉢
 17. バビロンの神秘
 18. バビロンの審判
 19. キリストの再臨
 20. メシヤの大勝利
 21. 完成
 22. むすび

6 『祝福された望み』

ーキリストの来臨と携挙についての聖書の学びー

ジョージ・E・ラッド著

- 導入
 1. 教会の歴史的希望
 2. 大患難前再臨説の起源と広がり
 3. 「祝福された望み」の語彙
 4. 大患難、携挙、復活
 5. 有効な推論
 6. 目を覚ましていなさい！
 7. 怒り、それとも患難？
 8. 正しく言葉を分類する
 9. 祝福された望み
 10. 結論

7 『千年王国の意味』ー四つの見方

編集：ロバート・G・クラウス

- 第一章 歴史的な千年王国説 (G.E.ラッド)
 - 序
 1. 解釈における問いかけ
 2. 千年王国説の脈絡
 3. 千年王国説
- デイスペンセーション主義的な千年王国説の立場からのレスポンス (H.A.ホイット)
- 後千年王国説の立場からのレスポンス (L.ポエトナー)
- 無千年王国説の立場からのレスポンス (A.A.フォーケマ)

8 『最後の事物』

ジョージ・E・ラッド著

1. 預言的聖書箇所をどのように解釈するか？
2. イスラエルについて、どうか？★
3. 中間状態
4. キリストの再臨
5. 再臨についての言葉
6. 反キリストと大患難
7. 復活と携挙
8. 審判
9. 神の国

9 『神の国の福音』

ジョージ・E・ラッド著

1. 神の国とは何か
2. 神の国の未来性
3. 神の国の現在性
4. 神の国の奥義

5. 神の国の生命
6. 神の国の義
7. 神の国の要求
8. 神の国、イスラエル、教会★
9. 神の国はいつ来るか

10 『終末論における今日的選択肢』

—千年王国についての研究—

ミラード・J・エリクソン

1. 第一部 背景
 1. シュバイツァーとドット
 2. フルトマンとモルトマン
 2. 第二部 千年王国についての見方
 1. 後千年王国説
 2. 無千年王国説
 3. 前千年王国説
 3. 第三部 大患難についての見方
 1. デイスベンセーション主義
 2. 大患難前再臨説
 3. 大患難後再臨説
 4. 中間的立場
- 結論

11 『新福音主義神学』

M.J.エリクソン著

- 「終末論」

12 『基督教教理入門』

ミラード・J・エリクソン著

- ①
1. 38章 導入的事柄と個人終末論
 1. 終末論への導入
 2. 死
 3. 中間状態
 4. 意味合い
 2. 39章 再臨とその結果
 1. 再臨
 2. 復活
 3. 最後の審判
 4. 再臨とその結果の意味合い
- ②
3. 40章 千年王国と大患難の見方
 1. 千年王国についての見方
 1. 後千年王国説
 2. 前千年王国説
 3. 無千年王国説
 4. その問題の解決
 2. 大患難についての見方
 1. 大患難前再臨説
 2. 大患難後再臨説
 3. 中間的立場
 4. その問題の解決
 4. 41章 最後の状態
 1. 義なる者の最後の状態
 2. 悪しき者の最後の状態
 3. 最後の状態の教理の意味

13 『キリスト教神学』

ミラード・J・エリクソン著

- ①
1. 56章 終末論への導入
 1. 終末論の位置づけ
 2. 終末論の分類
 3. 終末論の現代の取り扱い
 1. リベラルなアプローチ
 2. A.シュバイツァー
 3. C.H.ドット
 4. R.フルトマン
 5. J.モルトマン
 6. デイスベンセーション主義
 4. 終末論に関する結論
 2. 57章 個人終末論
 1. 死

2. 中間状態
3. 示唆されている結論

2. 58章 再臨とその結果
 1. 再臨
 2. 復活
 3. 最後の審判
 4. 再臨とその結果における意味
4. 59章 千年王国と大患難についての見方
 1. 千年王国についての見方
 2. 大患難についての見方
5. 60章 最後の状態
 1. 正しい者の最後の状態
 2. 悪しき者の最後の状態
 3. 最後の状態の教理の意味

14 『キリスト教神学における読み物』

ミラード・J・エリクソン編集

1. ■ 第37章 千年王国と大患難
 1. キリスト教的希望と千年王国(L.ポエトナー)
 1. 福音主義的一致
 2. 字義的と霊的
 3. 世界はよりよくなるだろう
 4. 聖書は何を語っているか
 5. 確かな勝利
 2. キリスト教的希望と千年王国(W.J.グリヤー)
 1. 見方の変化
 2. 旧約聖書の預言
 3. 一千年
 4. 新しい天と新しい地
2. ■ キリストの栄光の啓示(G.E.ラッド)
 1. ニつの時代
 2. 難しさを直視する
 3. 神学的必然性
 4. 来るべき世
4. ■ ディスベンセーション主義の前千年王国説
 1. 定義
 2. 主なディスベンセーション
 3. 地上における統治
 4. 他の保守主義者との一致

15 『パウロの終末論』

ゲルハルダス・ヴォス著

- 第10章 パウロにおける、千年至福説の問題

16 『聖書と未来』

アンソニー・A・フーケマ著

1. ■ 開始された終末論
 1. 旧約聖書の終末論的眺望
 2. 新約聖書の終末論の性質
 3. 歴史の意味
 4. 神の国
 5. 聖霊と終末論
 6. すでに、いまだ...ないとの緊張
 2. ■ 未来終末論
 7. 肉体の死
 8. 不死性
 9. 中間状態
 10. 再臨の期待
 11. 時のしるし
 12. 特別のしるし
 13. 再臨の性質
 14. 主要な千年王国の見方★
 15. ディスベンセーション主義的前千年王国説への批判★
 16. 黙示録20章の千年王国★
 17. からの復活
 18. 最後の審判
 19. 永遠の刑罰
 20. 新しい地
- 終末論における最近の傾向

17 『現代教義学総説』

H.G.ペールマン著、蓮見和男訳

- 第8章 最後の事物について
 - a. 前提
 - b. 現代の論争
 - 1. 現代的終末論か、未来終末論か？
 - 2. 歴史内在的終末論か、歴史超越論的終末論か？(神の国、新しい世界)
 - 3. 靈魂の不死性か、肉体の復活か？
 - 4. 死
 - 5. 現代人と終末
 - c. 要約

研究ノート

[[ホーム](#)] [[上へ](#)]

「終末論研究ノート」 - 終末論諸資料とその構成内容の比較

柴田師「終末論」「新キリスト教辞典」

概念と神学
終末論の展開
旧約・新約の終末観
再臨のしるしと時
死と中間状態
再臨と復活
最後の審判
新しい天と新しい地

宇田師「終末論」「新聖書辞典」

語義と概念
旧・新約を貫く基本的な構造
開始された終末
・・終末論と歴史
・・神の国
・・終末論と聖霊
死後の状態
再臨と「時のしるし」
・・再臨の教え
・・「時のしるし」
復活
最後の審判
*千年王国
・・千年期前再臨説・Pre-millennialism・ - ルネ・パーシュ「イエス・キリストの再臨」
・・無千年王国説・Amillennialism・ - グリヤー「終りの時」
・・千年期後再臨説・Post-millennialism・ - Boettner, Millennium

ペールマン師「終末論」「現代教義学総説」

A．前提

新約聖書
古代教会
中世
宗教改革
正統主義
啓蒙主義の時代

B．現代の論争

現代的終末論か未来的終末論か
歴史内在的終末論か歴史超越的終末論か
魂の不死性か肉体の復活か
死
現代人と終末、ないしは世俗的終末論

C．要約

キリスト教的終末論の核心

「キリストが裁き主であると共に救い主としてこられる」という事実

終末とは、

「現在的であると共に未来的であり、価値論的であると共に目的論的である。実存的であると同時に時間的に理解されねばならない。」

死は、

・ ・からだの破壊、 ・ ・罪に対する罰、 ・ ・社会的平等化、 ・ ・一方交通路、すなわち人間の決断の究極化、 ・ ・救済、すなわち確固としたキリストとの交わりの開始

宇田師「終末論」講義ノート

序論：教義学における終末論の位置・課題・研究の意義

近代神学における終末論の諸傾向

- ・ ・カント「啓蒙とは何か」
- ・ ・リッチュルの神の国
- ・ ・徹底的終末論（ヴァイス、シュバイツァー）
- ・ ・弁証法的神学（バルト）
- ・ ・実存論的神学（ブルトマン）
- ・ ・モルトマンと最近の傾向

福音派教会における終末論研究の現状（ディスペンセーション主義など）と文献資料

旧・新約に見られる終末論の基本構造

「開始された終末論」・ Inaugurated eschatology ・
キリストの再臨

世の終わりのしるし
からだの復活
最後の審判と新天新地
福音派教会と千年王国説
これからの福音派教会の終末論

「終末論」研究レポート (1996年2月・KBI教師会講演 / 安黒務)

終末論文献リスト

序・語義・概念・神学

旧約・新約聖書を貫く終末論の基本的構造

古代・中世・宗教改革・啓蒙主義・現代における終末論点描

近代・現代における終末論の展開

総論における議論の焦点「開始された終末」

各論「千年王国・患難と再臨の時期」

* * * * *

「組織神学序説」の必要性

- ・鳥瞰図をえる・「全体をまず把握し、それに基づいて部分を理解しようとする」
- ・重要な点を把握する・「重要・crucial・なことと些細・trivial・なことを区別する」

1. 終末論文献リスト

2. 序・語義・概念・神学

A. 終末論 = 終りの事柄に関する教理

B. 神の永遠の聖定に基づく「終り、完成」の部分

C. 終末論 - 啓示に基づく神学としての共通理解

a. 個人終末論 - 個人の時間的死、靈魂の不死、死から復活までの中間状態

b. 世界終末論 - 世の終わりのしるし、キリストの再臨、死者の復活、最後の審判、千年王国、新天新地 (世界の完成)

A. 終末論 - 啓示の解釈の多様性 数少なくない形態の終末論

a. 千年王国説

b. 患難期と再臨の関係

B. 近年の「終末論理解」 - 認識と自覚

a. 信仰の正しい理解 - 必然的に「希望論」へ

- b. 神の約束に基づくキリスト教的希望の教え - 信仰全体、信仰者の実存、宣教の基調
 - c. 聖書の終末論：三つの側面
 - I. 現在の側面 - 「私たちの中に」 ⅲ3:15,18,36, 5:24
 - II. 未来的側面 - 「私たちの前に」 黙示19:11以下
 - III. 彼岸的側面 - 「私たちの上に」 ⅲ23:43, ⅲ5:8, ⅲ1:23
 - C. 聖書の終末論：二つの視点
 - a. すでに「実現された」面、すでに「開始された」面 - 歴史観、神の国、聖霊の問題の考察の必要性
 - b. 「未来終末論」
- 3 . 旧約・新約聖書を貫く終末論の基本的構造

A . 旧約聖書 - 強い未来待望、終末論的性格

「ヘブル的知性は、最初から将来に対する希望によってとらえられていた」

「終末論は、救済史に根ざしたイスラエル信仰から直接発生した宗教的確信である」

- a. 約束の神 - イスラエルの生と希望の源泉
- b. 来たりたもう神、神の訪れ
- c. イスラエルの全地の王 - 王なる神の支配を預言、待望
- d. 契約の思想 - 新しい契約について預言
- e. イスラエルの解放と回復の日の預言
- f. 神の霊が再び豊かに注がれる日
- g. 新しい至福の時代の到来、新天新地の期待

以上、未来待望の信仰 - アブラハムを始めとし、旧約時代の信仰の根本的特色

B . 新約聖書 - 旧約の終末論的展望の中心 = メシヤ、贖う者の待望

イエス・キリストの受肉 - 旧約に約束されたメシヤの到来、成就

来るべき時代は開始された

旧約 = メシヤの来臨（一つの出来事）

新約 = 現在のメシヤの時代と未来の時代（二段階）

旧約の希望は「成就」したが、その「完成」
は未来のキリストの再臨の日

(O.カマ)・・ Warの勝敗を決する決定的な戦闘・D
デー・と勝利の日・Vデー・)

古代・中世・宗教改革・啓蒙主義・現代における終末論点描

A．古代教会 - 個人主義的な彼岸的終末論が優位、
連続的局面と全体的局面、個人的な様相と普
遍的宇宙的様相もわすれず

B．中世 - 五つの終末論的「受容の場」の教理
a.地獄、b.煉獄(浄化の場)、c.子供の間(洗礼を受けず
に死んだ子供の場所)、d.父祖(旧約聖書の敬虔な者た
ち、父祖たちの場所)、e.天国

C．宗教改革 - 裁き主(中世)から救い主の強調へ

D．正統主義 - 伝統的スコラ的・古代教會的終末論
a.死(個人の時間的死)、b.死者たちの復活、c.世界の完
成、
d.地獄ないし永遠の死、永遠の生命

E．啓蒙主義 - 脱終末論的傾向
a.裁きの地平うすれ、良心における終末「内的・裁きの
座」(カト)
b.観念的な個人的終末論

F．現代
a.唯物論 - 観念論に対立し、「終末論」を非神話化する
のみでなく、排除する
b.此岸から目をそらせる幻想(マルクス)
c.別のよりよき生に対する地上の生に対する「嫌悪感と
不快感」(ニーチェ)
d.神の国の信仰は世俗的なものへ、「人間の国」へ
e.人間の勃興と没落(二十世紀の中心テーマ)
f.人間の国の崩壊

近代・現代における終末論の展開

A．A.リッチェル - 歴史の中で発展する道徳的秩序としての神
の国観 - 終末的視点の喪失

B．ヨハネス・ヴァイス - 『イエスの神の国の教え』(歴史に突入
してくる神の国)
「破壊し再生するための歴史の中に噴きだす、そして人間が

推進したり手を貸したりすることができない、圧倒的な神の嵐の突出」

C. A. シュヴァイツァー 『イエス伝研究史』 (徹底的終末論)

「近づきつつある破局的な世界の終りに伴う超自然的な神の国の到来を待ち望んでいた」

D. C.H. ドット 『神の国のたとえ』 『使徒的宣教とその展開』 (実現された終末論)

「イエスの死と復活においてすでに来た」

E. J. エルミヤス (実現途上にある終末論) 「なお完成の時が来る」

F. A.T. ピンソツ (開始された終末論) 「連続性と未来性の調和」

G. R. フルトマン (実存的終末論)

「そのときそのときの実存的決断の『生』において実現、歴史的というより実存的、無時間的性質」

H. デイスペンション主義

「イスラエルと教会の分離・区別、文字どおりの解釈、教会時代は大挿入」

I. エルトマン 『希望の神学』 (政治的神学)

「神の変革を待ち望みつつ変革する、歴史における主導性」

J. テイリツヒ, R. ニーバ - (象徴的終末論)

「私たちの幸福は、超現世的、歴史的彼岸にある」

聖書解釈に基づく多様性だけでも十分複雑、それに社会的・思想的希望論が混入してさらに複雑に 福音主義の立場の「終末論」の必要性

総論における議論の焦点「開始された終末」

A. 終末論と歴史

大方の宗教 - 歴史に無関心、無時間的永遠の世界に関心、変化と流転の永遠の循環、

無意味を直観し、無常を悟る = 悲観的・宿命的な歴史観

聖書の歴史観

a. 世界は神によって造られた - 歴史の重視、神との関係における歴史

b. 歴史は神の目的、計画の展開過程 - 歴史においてご自身の御旨を啓示、実現

c. 歴史は全体として見られ、統一をもつもの

d. 神は歴史の主である

- e. イエス・キリストは歴史の決定的中心
- f. すでに「終り」のときは始まっており、完成はなお未来である
- g. 終末的現実
= 深い結びつき

B . 神の国 (G.E.ラット・神の国の福音・)

- a. 神の支配
- b. 神の国の「現在性」
- c. 神の国の「未来性」

C . 終末論と聖霊

- a. 預言的しるし - 終りのときの幕開けの道備え
- b. メシヤの上に - 必要な賜物
- c. 物質、倫理の両面において、刷新し祝福する源
- d. 悪霊の追放
- e. 聖霊とすべての賜物
- f. 来るべき栄化の一部、御国の前味
- g. 聖霊 - 終末の「始めの実」であり、
同時にすでに始まった終末の完成を準備しつつ、達しつつある

各論「千年王国・患難と再臨の時期」

- 1・千年期前再臨説・Pre-millennialism・
- 2・無千年王国説・Amillennialism・
- 3・千年期後再臨説・Post-millennialism・

参考文献：「新聖書辞典」「新キリスト教辞典」「総説教義学総説」、他

感想、質問、登録、注文、コピー・印刷、資料代金・支援献金窓口

このページをご覧くださいありがとうございます。感想メールなどいただけたら感謝です。あなたのメールをお待ちしています。

aguro@mth.biglobe.ne.jp : 郵便振替口座番号 : 01110-0-15025 加入者名 : 一宮基督教研究所

三井住友銀行 ドットコム支店 支店番号953 普通預金 口座番号1412949 受取人名 : イーバンクギンコウ (カ)